

グループ・ディスカッションの司会者を対象とした グラウンド・ルールに関する調査

Understanding the Implementation of Ground Rules: A Study Based on Group Discussion Facilitators

中野 美香

Mika NAKANO

福岡工業大学

Fukuoka Institute of Technology

<あらまし> 本研究は、大学生のグループ・ディスカッション（GD）における「やりづらさ」の軽減を目的に、話し合いを支援するグラウンド・ルール（GR）の有効性を検討した。講義でGDを実施後、司会者経験者315名に質問紙調査を行った結果、94.9%がGRの導入を肯定的に評価した。自由記述の分析では、「話し合いのスムーズさ」「発言の促進」「心理的安全性の向上」などが主な効果として報告された。一方で、班の特性や既存の関係性によっては効果が限定的であるなどの課題も見られた。GRは、初対面や異質なメンバーによるGDにおいて特に有効であり、今後はルールの定着や振り返りの工夫が求められる。
<キーワード> コミュニケーション、遠隔教育・学習、学習環境、教育方法、授業実践

1. はじめに

近年、遠隔・対面の状況を問わず対応可能な汎用的なグループ・ディスカッション（GD）能力が大学生に求められている。しかし、複数の話者が参加するGDの行動規範の多くは明示されておらず複雑であり、「やりづらさ」を感じる学習者は少なくない。そこで、筆者は「やりづらさ」の解消を目的としたグラウンド・ルール（GR）の有効性に着目した一連の研究をおこなってきた。GRは会議や話し合いで設定するルールや方針のことで、「相互の主張や発言内容、発言の意図を正確に理解するために厳密な言語学的知識に加えて、会話の参加者が保持している事が必要となる、ひと揃いの暗黙の理解」（Edwards & Mercer, 1987；松尾・丸野, 2008）を指す。中野（2024）ではGDの経験者を対象に調査を実施し、初期熟達化に必要なGRをカテゴリー別に分類し、リスト化した。これにより、初心者でもリストから適切なGRを選び、グループで活用し、活用することができる。一方で、実際にGDにおいてGRがどのように決定されるかその検討プロセスは未検討であった。そこで、本研究はGDの司会者を対象にGRに関する質問紙調査を実施し、検討過程を明らかにすることで、GRの効果的な運用方法を明らか

にすることを目的とする。

2. 方法

15回のうち13回の講義でGDを実施し、後半でGRを導入した教養科目の受講者を対象とした。この講義では約60分間の心理学の講義と約30分のグループワークで構成される。グループワークでは4名程度のグループで講義内容に関してディスカッションをしてもらった。第3回以降の講義では毎回、ランダムで席を替え、初対面の受講者とディスカッションする機会を設けた。講義では10分程度、GDの技法（中野, 2018）に関する講義も行った。第2～8回講義では「GR無し」のGDを実施し、第9回でGRについて説明・導入した後に、第9～14回は「GR有り」のGDを実践した。

第15回講義の終了後、GRを導入した第9～14回講義でGDの司会者を務めた受講者を対象にGRに関する質問紙調査を実施した。調査の趣旨の他、授業改善を目的としたもので回答内容は成績評価に一切関係がないことや、個人が特定される形で公表されることはないことについて説明し、協力者から同意を得た。調査はMicrosoft Formsを用いてオンラインで回答してもらった。調査は2022年度後期から2024年度

後期の期間に開講された4期の講義で継続的に実施した。本論で分析した質問項目は、問1「GRの導入は効果的でしたか」、問2「問1の回答理由を教えてください」である。315名の司会経験者から回答を得た。

3. 結果と考察

問1「GRの導入は効果的でしたか」に対する回答の内訳は以下の通りであった。「そう思う」および「ややそう思う」と回答した参加者は合計299名で、全体の94.9%に達した。これに対し、「あまりそう思わない」「そう思わない」といった否定的な回答は7名(2.2%)に留まり、「わからない」は9名(2.9%)であった。この結果から、GRの導入は司会者の大多数にとって肯定的な効果があったと受け取られていることが明らかとなった。特に、「そう思う」と明確に肯定した回答が全体の約4分の3を占めており、これはルールを単に導入しただけでなく、その内容や運用方法が実際のGDに役立っていたことを示唆するものである。

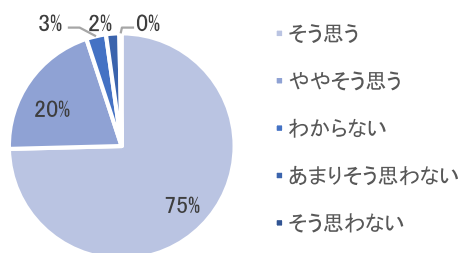


図1 問1の回答の内訳

問2「問1で回答した理由を教えてください」の自由記述データ分析した。その結果、以下の6つのカテゴリーに分類できた：①話し合いのスムーズさ・効率性、②発言の促進・全員参加、③雰囲気・心理的安全、④意識化と責任感、⑤効果が限定的・変化なし、⑥否定的・懐疑的意見。最も多かったのは「①話し合いのスムーズさ」に関する記述であり、約4割の学生が「進行しやすくなった」「スムーズに話し合えた」と実感していた。これは、GRが議論の構造化や役割の明確化を促進し、GDを円滑にする機能を果たしていたと考えられる。次に多く見られたのが「②発言の促進・全員参加」であり、「1人1意見」などのルールが、普段あまり発言しな

い学生を引き出す手助けとなっていた。これは、ルールが発言機会の均等化に寄与し、グループ内での参加の偏りを抑える実践的な手段になり得ることを示している。また、③の「心理的安全」や「雰囲気の改善」に関する記述も多く、「初対面でも話しやすかった」「笑顔や相槌で距離が縮まった」といった感想が寄せられた。これは、GRの導入により安心して発言できる環境が構築された結果であり、協調的な雰囲気づくりにルールが貢献していたことがうかがえる。④意識化と責任感については、「当事者意識が生まれた」などの回答が得られた。GRを設定する過程で行動規範が明確になることで、行動変容を促す「内発的動機づけ」の役割を果たしたことがうかがえる。一方、「⑤効果が限定的」あるいは「変化が見られなかった」とする記述も一部見られた。特に「元々話せるメンバーだった」「ルールがなくてもできた」という声からは、グループの性質や既存の関係性が効果に影響することが示唆される。また、⑥の「ルールを忘れていた」といった否定的意見も少数ながら存在し、形骸化のリスクや定着支援の必要性が示唆された。

4. まとめと今後の展望

以上の結果から、GRの導入は、特に初対面や異質なメンバー構成のグループにおいて、話し合いの活性化や心理的安全の確保に効果的であることが明らかとなった。ただし、その効果を持続的に引き出すためには、ルールの具体性や実施後の振り返りといった運用面の工夫が重要である。

参考文献

- 松尾剛, & 丸野俊一. (2008). 主体的に考え、学び合う授業実践の体験を通して、子どもはグラウンド・ルールの意味についてどのような認識の変化を示すか. 教育心理学研究, 56(1), 104-115.
- 中野美香 (2018) 大学生からのグループ・ディスカッション入門. ナカニシヤ出版
- 中野美香 (2024) 大学生のグループ・ディスカッションの支援を目的としたグラウンド・ルールに関する調査. 日本教育工学会 2024年秋季全国大会講演論文集, pp.61-62.